空想書店

2月の店主は
亀山郁夫
さんです

かめやま・いくお　1949年、栃木県生まれ。ロシア文学者。東京外国語大学長を経て、現在は名古屋外国語大学長。『カラマーゾフの兄弟』などドストエフスキーの新訳でブームを巻き起こす。著書に『謎のロシア』『謎と愛と悪霊』など。近刊は、初めての小説『新カラマーゾフの兄弟』上・下（河出書房新社）。

名古屋に来てはや三年、日々その奥深さに魅了されている。とくに市の東部から、古戦場として知られる長久手、日進の一帯が魅力的だ。歴史の上を時が滑るといった感覚は、東京に暮らしていたときは決して得られなかった独特のもの。この一帯は、2005年の「愛・地球博」以来、全国的にその名を知られ、今は新興のベッドタウンとして人気があるが、住宅地の切れ目にところどころ田園地帯は、今もどこか荒涼の気を漂わせて、なぜか芭蕉のあの有名な一句へと思いを誘う。

「夏草や兵どもが夢の跡」

だが、私が何よりも心惹かれているのが、地下鉄東山線の終着駅、藤が丘。とくに駅前の少しひなびた感じが微妙にノスタルジーをそそる。ある時ふと思い当たった。モスクワの地下鉄ターミナル駅ユーゴザーパドに似ている！　今から二十年以上前のこと。その駅近くにロシア有数の前衛劇団の本拠地があって、シェークスピア『ハムレット』やブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』の新演出を楽しみに出かけていった。舞台がはね、夜も更けてオオスクの乏しい光に照らしだされた駅前広場に辿りついたときの安堵感、いや寂寥の味わいが今も深く胸の奥に滞る。

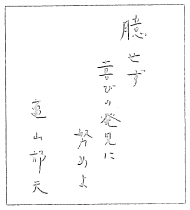
藤が丘駅から西に三分ほど歩いたところに、私の「空想書店」はある。萩原朔太郎の詩にちなんで「青猫」と名づけられた地下のJAZZ茶房がそれだ。堅牢なコンクリート造りの何やら秘密めかした雰囲気は、まさに「隠れ家（エルミタージュ）」の趣。だが、牢獄の門を思わせる重い鉄の扉を開くとそこはもう超モダンな別世界である。カウンター右脇の壁は、床から天井までジャズのCDで埋め尽くされ、さらにその右脇には、黒のアップライトが灰色の壁と溶け合うようにして息を潜めている。外光はいっさい入らない。

この「青猫」を拠点に、今や日本を代表する読書サークルに成長したのが、「猫町倶楽部」。私自身、この巨大な地下スペースで、全巻通読した百人近い若者を相手に『カラマーゾフの兄弟』を講義した。私は「空想」する。ドストエフスキーに憑かれた古今の大作家たちの小説をここに集め、知的渇望に苦しむ名古屋、いや全国の若者たちと熱く語りあえたらどんなにすばらしいか、と。

◇

丸善丸の内本店（JR東京駅前）の3階で、近日中に亀山郁夫さんの「空想書店」コーナーが登場します。

知を渇望する若者 集まれ



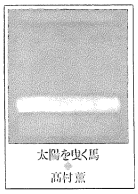
店主の一冊

●『決壊』（平野啓一郎著、新潮文庫、上670円、下710円）地方に住む平凡な一家族が、ネットの暴力に巻き込まれ、無残に崩壊していく姿を前衛的な手法で描き出す。そのテーマは、現代のISのニヒリズムまでも照射する。

●『海辺のカフカ』（村上春樹著、新潮文庫、上710円、下750円）21世紀の現代日本を舞台にして展開する『オイディプス』。「父殺し」のテーマの可能性をとことん追求する。

●『許されざる者』（辻原登著、集英社文庫、上下各880円）和歌山県新宮を舞台に大逆事件を扱う。『悪霊』をモデルとしつつ、トルストイ『戦争と平和』のスケールを獲得した。

●『湿原』（加賀乙彦著、岩波現代文庫、上下各1300円）1960年代終わりの学園闘争を背景に、自動車整備工と女子大生の逃避行、覚醒剤との戦いを描く。鬼気迫るスペクタクル。



●『太陽を曳く馬』（高村薫著、新潮社、上下各1800円）画家の青年の無動機殺人と、一億倍の事故死を交互によりあざないながら、罪とは何か、死とは何かをめぐって執拗に問う。

大河内 直彦
ページの向こうに

リーはアメリカ海軍の軍人として職務を負って日本にまでやってきたゆえ、本件はアメリカ側の視点も交えて双方向的に論じられるべきである。当の本人による『ペリー提督日本遠征記（上・下）』（角川ソフィア文庫、上下各880円）（とはいえ四～五代ほど前の世代）の暮らしが、第三者の視点で克明に記録されているからだ。当時の人々はどんな暮らしをしてたんだ？　という野次馬根性さえあれば十分楽しい読み物となる。

（ニコラス・ロビンソン著、ポプラ社、上下各1500円）

の長期遠征を齢（よわい）五八にして命ぜられ、和親条約の翌年に帰国した時には還暦を過ぎていた。無理がたたって帰国後三年余りでペリーは鬼籍に入るのだが、その間、第三者に記させたのが本書である。シードレトネおうろうりこニマ

洋食セーヌ軒　神吉拓郎著

旅に出ると、行く先々のおいしい水を楽しみにする男がいる。「（東京の水は）浄水器とかを使ってみても、しょせんは死んだ水だからなあ」

古い友人の山荘で、新緑な水でたてた新茶を飲み、朝釣りの岩魚の塩焼きなどを堪能したこの男が、生き生きとした気分を回復し、「なくした妻」のことを考える「雪の峰」など17編。トリュフ入りオムレツ、牡蠣フライから小学校時代の弁当の味まで、忘れがたい味がもたらすドラマを、上品に描く極上の短編集である。

食べる、寝る、新陳代謝する。これは生きるために欠かせぬ行為であるが、どこか忍びやか。2人で食べる。甘美さもいいが、修学旅行の枕投げのように大勢でわいわい食べるのも楽しい。

神吉拓郎（1926～94年）は野坂昭如らとともに三木鶏郎グループの一員としてテレビ台本などを書き、55歳で直木賞をとった。きれ味のいい文章で〝調理〟された食事場面は、どれもこれもうまそうだ。これぞ大人の味わい。（光文社文庫、700円）　（縞）

ポケットに1冊

文庫・新書

『双頭の船』　池澤夏樹著

大きな波が全てを壊してしまった町。自分にも何ができると思った人々が集った復旧支援の船は、魔法をかけられたかのように、次第に広くなってゆき――。この空っぽの場所の至るところに草の種みたいな神話の種が埋まっているのが見える気がした。いつかそれが芽を出して伸びる。5年前の震災を何度でも想うための、共生の物語。（新潮文庫、550円）

『大人のためのメディア論講義』　石田英敬著

文明の移ろいは人間の生活だけでなく、意識、無意識にまで多大な影響を及ぼす。アナログからデジタルへ。便利さの裏側で、われわれは何を失いつつあるのか。メディア

る透明で孤独な1編。なお、的まとんの『あまりにロシアいて混（文庫）を思い出して純ト崩壊から3年、混の日々がつづられた濃密

◆絲山秋子さん特集、22が迫ってきました。ふるください。　（則）

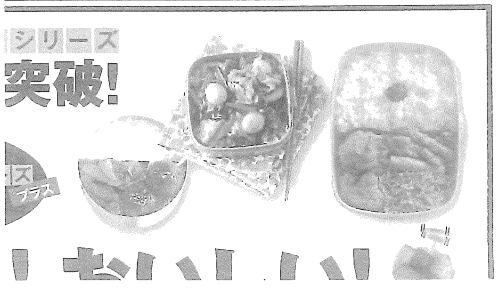
◇

のソムリエ」への相談は、online@yomiuri.com）、・3279・6482）、郵便（〒号新聞文化部「よみうり名前、年齢、住所、電話てください。

秋子特集

00円の図書カード進呈

シリーズ
突破!



クックパッドから「基本」のレシピを厳選して一冊に!
cookpad
クックパッド
全レシピ プロセス写真付き!
だから
見やすい、わかりやすい!